

# 石原 謙における宗教と神秘主義

——とくにシュライエルマッハーの「宗教論」をめぐって——

水 谷 誠

は じ め に

1914年初頭に出版された石原謙訳著「シュライエルマッヘル宗教論」は、F. D. E. Schleiermacherの“Über die Religion. Reden an die Gebildeten unter ihren Verächtern, 1799”を翻訳した部分と二つの論文からなっている<sup>1)</sup>。この翻訳はシュライエルマッハーの著作の訳としては本邦初のものであり、後に続いた同書の他の研究者による訳業の模範となった<sup>2)</sup>。またそれに付された二つの論文「序説 シュライエルマッヘル評伝及び其の著『宗教論』」そして「『宗教論』内容解説」は当時のシュライエルマッハーについての重要な研究文献を渉獵した上でまとめられたものであり、日本におけるシュライエルマッハーの最初の学問的研究であると言うことができよう。この研究は彼の専門領域であったキリスト教の歴史的研究の根拠である宗教の真理問題を扱うものであった<sup>3)</sup>。石原自身が後年に書き記した思い出によると、彼はシュライエルマッハーの「青年時代の宗教理解の態度と後年の思想との差異を明かにしつつ、この生気に満ちた著作をあらゆる角度から解説」しようとしたのである<sup>4)</sup>。当時この訳著は、ドイツの宗教哲学の紹介が稀であったという事情からも注目をひき、1919年に第二版、1922年に第三版を出している。この「宗教論」が外国語に翻訳されて出版されたのは、J. Omanによる1894年の英訳が最初であるが、1911年に出されたロシア語訳に次ぐ第三番目の外国語訳としてドイツ語圏以外に紹介された時期も早く、この点でも注目に値するといえる<sup>5)</sup>。

私はこの日本におけるシュライエルマッハー研究の端緒となった記念碑的作品において、石原は如何なる立場をとって訳出をなしたのかを探求したい。こ

※本論文は、1983年3月29日、梅花女子大学で開催された日本基督教学会近畿支部会において発表した研究を、加筆文章化したものである。

の事で高倉徳太郎に始まり既に70年に及ぶ歴史を持つ日本におけるシュライエルマッハー研究及びその受容の一つのあり方をふり返ってみたいと思うからである。初めに、石原が取り扱った底本について論じ、それから翻訳に付された二論文における理解を見、さらにその理解を1916年に刊行された「宗教哲学」に基づいて敷衍して、石原の当時の「宗教論」理解を考究する。

## I 石原訳の底本について

シュライエルマッハーは生時に「宗教論」を二度改訂して出版している。すなわち1805年に刊行され、特に第二講に多くの変化が見られる第二版、そして本文は第二版とあまり変りはないが、各講末尾に詳細な補遺をつけた1821年の第三版である。その後なお1831年に第四版が出ているが、これは第三版と違いはない。石原は、はじめこの第三版によって訳出を志したが、研究の進むにつれて「初版の遥かに優れるを感ずるに至<sup>7)</sup>り、恩師ケーベル博士の勧めもあり第一版を利用することとなった<sup>7)</sup>と言う。このことにより底本としてR. Ottoが「宗教論」第一版刊行100年を記念して編集し1899年に出版されたものが採用され、そのかたわら、この三版を比較対照させたG. C. B. Pünjer編集のもの及びO. Braun/J. Bauer編集の四巻本選集に載せられた第一版が随時参照され<sup>8)</sup>訳稿が出来上がった。

さて、石原がこの第一版を訳出に利用した根拠であるが、これは必ずしも第一版と第三版の宗教哲学的・神学的思想の特質について対照比較した結果、第一版の優秀性を認めたためであるとは言い難い。まず石原の説明を敷衍して第一版と後の版の一般的特徴を叙述してみると次のようになる。<sup>9)</sup>第一版は主としてロマン主義の強い影響のもとに成立したものであり、第二講において宗教一般の本性が述べられる。しかし宗教そのものは抽象的なものではなく具体的な歴史的現実の中で成立するものである故に、第五講において積極的宗教としてのキリスト教に関心を向けた叙述が展開される。この両講に石原は共に意義を認め「宗教論」の「中心的思想は前半に於て尽きて居る」と述べると同時に、第五講において積極的宗教に特別の価値を置いたのはシュライエルマッハーの「最も大なる貢献<sup>10)</sup>」であったとする。その後神学研究がさらに深化し教会活動

も拡大されることを通じて、シュライエルマッハーの中にこの積極的宗教としてのキリスト教への関心の比重が高まり、その結果、このキリスト教の存立維持を主目的とする観点から改版が企てられた。第二版では宗教概念を扱った第二講を大幅に改訂し、1821年の第三版では、特に同年から翌年にかけて出版された彼の名著「キリスト教信仰」第一版の神学思想との調停を念頭に置いて詳しい補遺がつけられた。このことにより後の版、特に第三版は「多くの妥当ならざる文字が改められ凡てが完全に」<sup>11)</sup>なったのである。この説明から分るように第三版にも石原は充分に意義を認めているのであり、第一版に比して特別にその価値が減じられることはない。結局第一版を利用した理由は別の所にあるといえる。

この理由は、両版を共に評価する態度と同時に石原が持っていた、両者の間には矛盾が存在するという見方に関連する。この見方は既に第一版出版当時よりなされていた批判、すなわち第二講の宗教一般の本性の叙述はキリスト教信仰と相容れないとする批判に対応しているともいえるが、<sup>12)</sup>石原は第五講の観点からキリスト教の存立をはかって改版された後の版、特に第三版においてシュライエルマッハーは「調和す可らざる両時代の思想を強いて彌縫」しようとしているとしてこの矛盾を強調する。<sup>13)</sup>すなわち、第三版にはロマン主義の思想的影響のもとに成立して宗教一般の本性を叙述する上で生彩のあった第一版の上に重ねて神学者としての成熟した後年の思想が付け加えられ、両時代の思想的相違の調停を意図したが結果的にはそれが果たせず、いわば水と油のように両者が溶け合うことなく混在していたと石原は見るのである。それに比べて、第一版は「種々の欠点は存するにしても青年時代の活躍せる情調熱誠」を持ち躍動感あふれる形で一気に書き下された統一性があり、<sup>14)</sup>そのことに我国に「宗教論」を初めて紹介するにふさわしい生々としたものを石原は感じとったように思われる。

この点では、石原は R. Otto 以来定着した第一版重視の態度と歩調を合わせている。シュライエルマッハー没後広く行き渡った版は、シュライエルマッハー生時の1831年になお出版された第三版と変りはない第四版であった。これは全集に採用され、1843年に第五版として、また1859年、1878年に第六版、第

七版としてそのまま現われている。その間の1868年には、C. Schwarz もまた新たにこれを編集出版している。<sup>15)</sup>ところが、R. Otto が1899年に第一版を編集出版して以来流れは変わり、1911年の先に述べた Braun/Bauer の四巻本選集のもの、1912年の M. Rade 編集の第一版へと引き継がれた。これは現在にも踏襲されている態度であり、1958年に出された H.-J. Rothert の哲学文庫本<sup>16)</sup>、1969年の C. H. Ratschow のレクラム文庫本も同じく第一版に基づいている。ちなみに1967年には Otto 版が第六版として再刊されたし四巻本選集も復刻されている。要するに「宗教論」第一版を重視する立場は Otto 以来定着したものであり、この石原もその線上にあると言ってよい。<sup>17)</sup>

ただし、石原が訳出の際の底本とした Otto 版は言うまでもなく Otto 独自の第一版を重視する理解を基礎としており、その理解に石原が同調した結果それを底本としたというわけではない。Otto の主たる意図は、宗教の本質を言い表わす諸表象を追求することであった。そのような諸表象は「宗教論」各版の中では第一版に最も直截に豊富に現われており、その第一版を学問的に深化させようとした後の版は厳密化を期して表現に抑制が加えられているために、かえって宗教的諸表象を叙述するという点では平板化されてしまっている<sup>18)</sup>と考えるのである。

## II 訳書の「序説」及び「内容解説」における理解

さて「序説」の第五章は「『宗教論』の思想の傾向及び特色」と題され、「宗教論」第一版の内容について詳しく論及している。まずこの箇所における理解を見たい。石原は「宗教論」執筆当時のシュライエルマッハーの思想的背景として三者をあげている。一つはロマン主義、一つはヘルンフト兄弟団、そして当時の哲学である。シュライエルマッハーは1796年以降ベルリンのシャリテ（慈善病院）付牧師として活動したが、このベルリンでシュレーゲル兄弟を中心としたロマン主義の運動の影響を深く受けた。それはまず「宗教論」の「外形的文体態度」に現われている。この書の「文勢又情調は、確かに詩と真理の表現とを近づけて一致せしめんとするロマンティックの精神から起って居る」の

であり既にこの意味で「宗教論」はロマン主義の代表的作品たり得る。<sup>19)</sup>しかしそれにとどまらず、内容の点においても影響は強く、シュライエルマッハーが「宗教の内部的なることを極端に主張」したのは、ロマン主義が「無限の内部性を重」んじたことと呼応している。<sup>20)</sup>この内部的経験を強調する態度は、シュライエルマッハー自体が成長した敬虔主義の一派、ツィンツェンドルフによって導かれたヘルンフト兄弟団より得られた感化でもある。<sup>21)</sup>またシュライエルマッハーの哲学研究の結果得られた成果も無視できない。特に「宗教論」において展開された宗教的直観の範囲は、「学術的認識の限界を定めた」カントの批判哲学に呼応して「悟性以外」に置かれた。加えて他にスピノザ、ライプニッツ、フィヒテ、シェリング等との関係も言及される。<sup>22)</sup>

「宗教論」はこのような思想的背景をもって成立したのであるが、その独自の思想は特に彼の宗教概念の叙述に現われているのであり、石原は第二講に述べられている有名な宗教についての定義、「その本質は思惟でも行為でもなく、直観と感情である」という表現の説明に入る。<sup>23)</sup>人間の精神活動はすべて「宇宙」を対象としている。この「宇宙」とは「客観的實在」、「『一切』の中に遍通せる『一』」であり、理性的に活動している。この「宇宙」の活動を人間は「理解することは出来ないが、現象を通して感受し得る、云はゞ詩人的、天才的に之を予感し直観し得る」。これが宗教であって、「宇宙」を探究して概念化する哲学や、それとの関係において「義務の体系」を導き出す道徳とは違い、「冥想的に又帰依的に其を経験すること」なのである。さてこのことは、専ら人間の内的精神的生活を舞台として生じるのであって、「此の直接的内部的経験に宗教の本質を認めたることはシュライエルマッハーの大なる功績であった」。<sup>24)</sup>

この際、「宗教論」の後版においては「宇宙の直観と感情」という定義のうち「直観」という言葉が稀になり、「感情」という言葉が前面に出てきて、宗教の本質をもっぱらそこにおいて認めようとする傾向が現れていることに石原は言及し、批判する。つまり感情とは心情が「宇宙」を直観することによって生じた心の内的変化でしかなく、「宇宙」という客観的實在を見ようとする唯一の窓である直観を捨てようとする態度は、宗教を全く主観的現象に追いやっ

てしまうものであり、この点で石原は第一版の意義を認めている。<sup>25)</sup>

さて、シュライエルマッハーの宗教の本質の定義に対する石原の論及において特に目をひくと思われるのは、「宗教は直接の内部的経験である」ということを「それは神秘的経験である」と言い換えていることである。いくつか例をあげれば、先に述べたロマン主義よりの影響について述べられた箇所、宗教は、「人間の心の奥底に深く蔵れて居る隠微なる神秘的経験である」と述べる。あるいは宗教概念を論じた所では、宗教は、「有限物の中に於て無限者を、個々物の中に於て全体を見出し、而して其の活ける作用に触れ、之と一致し融合する神秘的経験」であると言ひ表わす。<sup>26)</sup> さらに Otto にその叙述を主に負っていることを訳著の「序」において表明している「内容解説」では、シュライエルマッハーは「神秘的なる内部的経験……を重んじて此を宗教の根源とした」という。そして「我々の周囲を困める現象に於て絶対的永遠なる実在を認知すること」、言い換えれば「此の物質的世界の無限性に於て精神的存在の顕現を経験せんとする態度は明かに著者の神秘的傾向を示すものである」と述べる。<sup>27)</sup>

言うまでもなく、シュライエルマッハー研究史において、この「宗教論」の思想が神秘主義であるのか否かというテーマは、彼の宗教思想・神学を評価する上で重要な論点となってきたものである。E. Brunner はその有名なシュライエルマッハーと対決した著作「神秘主義と言葉」において、この書の目的は「シュライエルマッハーの欲した事と使徒及び宗教改革者の信仰世界とは相対立していること、すべての神秘主義的内在哲学と聖書のキリスト教との間で同盟を結ぶことは本質的には不可能であることを……証明すること」であるとして痛烈に批判した。<sup>28)</sup> その逆に、H.-J. Rothert は彼の編集した「宗教論」第一版の序において、シュライエルマッハーは「空虚でこの世界から目をそむけた神秘主義に対する強力な防壁を築」こうとしているとして、神秘主義者シュライエルマッハーという非難を退けている。<sup>29)</sup> あるいは、R. Otto のようにこの「宗教論」に神秘主義的表象を認めつつも、もっぱら宗教概念の特性を探求することに意を用いそれが神秘主義か否かという事に関心及び判断の決定的な基準を見出さない立場も存している。<sup>30)</sup> このように種々の立場があるということの

理由として、論者の神学的・宗教哲学的立場の相違と同時にそれとの関連で神秘主義という概念がさまざまであるということをおげることができるだろう。この点で、石原は一体「神秘的経験」ということをどのように理解していたのであろうか。次にこの二年後に出版された「宗教哲学」によって神秘主義の意味を探り、石原の訳著と照らしあわせて彼のシュライエルマッハー理解を明瞭にしたい。

### Ⅲ 「宗教哲学」（石原著）における神秘主義理解

石原の「宗教哲学」<sup>31)</sup>は1916年7月に岩波書店より出版された。石原が「宗教論」の訳著を内田老鶴圃より刊行したのが1914年1月であるから、遅れること2年半、さらにこの訳著の再版がその3年後、1919年9月に改訂されずに出されているという時間的前後関係を見れば分るように、この二著の間に内容的に特に大きな矛盾が存在するとは考えにくい。この「宗教哲学」における神秘主義理解は、訳著におけるシュライエルマッハー解釈を補完するものとみなすことができるだろう。

神秘主義は、まず「あらゆる現実の根柢に存する」「絶対的实在」を「闇冥なる衝動的なるもの」だとみなす。この实在はただ「我々の情緒に於て感悟味得」され、「瞑想の機縁」とされるのみであって、理性の対象として概念化されることはないし、我々の道徳的理想となることもない。神秘主義は外部的形式的なものに全くとらわれることなく、またそれを追い求めることなく「唯だ純粹に内的なる心的活動に於て」この絶対的实在との「直接なる融合一致を経験することに集中」しようとする。神秘主義にとって、歴史的社会的に現れたものは、その内的経験において神に向かおうとするあり方を妨げる障害物といえる。<sup>32)</sup>

さて、このような神秘主義を基礎とする種々の哲学的・宗教的思想は共通していくつかの特徴を持っている。まず第一に、人間の心の内部での経験において「神は我が心の中に在し我は神の光の中に包まれ照されて融け合ひかくて我が本性は化して神性となる」という神人の融合一致が自由に行なわれる体験であ

る。第二に、神秘主義は「神の人格性を否定する」。人格性の思想は「『我』を『汝』と相対立せしめ其間に打踰え難き溝渠の存することを明かに意識せしめる」ために、これを主張すれば、神と人との結合は不可能となってしまう。第三に、神秘主義は神人の本質的一致を認めるものであるが、この一致は無条件に行なわれるのではなく、「転変常なき世界の中にありて有限なる人間が無限絶対の神を認識し之と融合する」こと、すなわち有限なる自己がその自己の有限性を脱して無限の境地に入るという二元論的世界理解を前提している。<sup>33)</sup>

この神秘主義の特徴を「宗教は神秘的経験である」というシュライエルマッハーの宗教に対する訳著の理解に照らし合わせてみるならば、確かに対応するものが存在する。宗教は「有限物の中に於て無限者を、個々物の中に於て全体を見出し、而して其の活ける作用に触れ、之と一致し融合する」<sup>34)</sup>経験であるという表現は、上に述べた神秘主義の第一と第三の特徴に符合するであろう。またシュライエルマッハーは神の人格性という思想をそもそも重要視していなかったという石原の指摘は、第二の特徴に通じるといえる。<sup>35)</sup>さらに第三の特徴とシュライエルマッハーの宗教思想との関連について石原は「宗教哲学」自体において言及し、シュライエルマッハーが神秘的著作家たり得ているのは「現在世界に対して瞑目し静かに内的に永遠世界の風光を眺望」しようとするからであると述べている。<sup>36)</sup>何よりも、シュライエルマッハーが宗教的直観を思惟と道徳から区別していること自体の中に石原は神秘主義的傾向を認めていたであろう。いずれにしても石原にとって神秘主義は「宗教の内的生活の真髄に触れて居」るのであり、宗教から神秘的傾向をはずしてしまうならば、それは宗教を「枯死せしめる」ようなものであった。<sup>37)</sup>

しかしそれにもかかわらず、宗教の中でも特に積極的宗教を取り上げた時に、それは本来の神秘主義とは全く相容れないということもまた認めざるを得ない。宗教とは石原の基本的理解では積極的たるものでなければならず、抽象的思惟からではなく実際の生活上の経験から出発し、その歴史的現実の中で教義信条を形成した教会という社会的集団を作り上げる。ところが神秘主義は、ひたすら純粋な内観に終始しそこにおいて神と結合しようとする故に、教義信条等の媒介物は自己の心における出来事、神への集中を妨げるものでしか

ないとみなす。要するに神秘主義は「歴史的啓示の上に立てる教会から異端として排斥」されてきたし、逆に「神秘家に取りて歴史的宗教々団は如何なる意味からも価値は与へられ」<sup>38)</sup>なかったのである。

それでは、神秘主義と相容れない積極的宗教としてのキリスト教と、神秘主義は「宗教の真髄に触れている」とする理解はどのような関係にあるのだろうか。このことを説明するために石原は A. Ritschl と W. Herrmann の神学思想、及び M. Luther と神秘主義との関係について触れる。以下その箇所を引用して示したい。石原によれば Ritschl は「神秘的傾向を必然的に有する宗教の一般概念から出発しないで、……神の歴史的啓示としての基督の人格によって高められる生ける実際の内的経験から進んで直ちに特有な基督教の意識に到達しようとした」という。また Herrmann は「基督の人格といふ客観的事実の経験の外に基督教の信仰の根拠なき」ことを主張した。<sup>39)</sup>ここでは、いずれにしてもキリスト教信仰の本質は、歴史的キリストに関わる経験に存するということが言われている。この仲保者を経由することなく直接に神と関係を持つとするならば、それはキリスト教と無縁のものとなってしまう。しかし神秘主義の意義はそのことで全く否定されてしまうのではない。M. Luther は自己の信仰を形成する過程において神秘主義と接触した。彼は「内的経験に転向しようとする真に宗教的な態度を常に神秘から学ぶことによって自己の本質を開展せしめるやうに努力」した。そしてその結果、「信仰の確実性を樹立するを得さへすれば、否樹立すればする程に、益々固有の神秘思想から遠ざからう」としたのである。<sup>40)</sup>つまり Luther は、内的経験を強調する神秘主義を通過することによって宗教改革の信仰に達することができた。そこには神秘主義を福音主義信仰を獲得するための、ただし獲得した段階では克服すべき一つの過程、換言すれば、真正な信仰へ至るに必要な契機とみなす理解があるといえる。ここに神秘主義をある一定のワクをはめてではあるが積極的に評価していく石原の立場を見ることができる。

## 結 び

前節末で指摘した事は明らかに、第Ⅰ節から第Ⅱ節にかけて示した事、すなわち「宗教論」第一版では神秘的経験としての宗教一般の本性が、そして後の版では積極的宗教としてのキリスト教が強調されるが、この両版は内容的に相矛盾すると共にそれぞれ固有の意義を持っているとする石原の「宗教論」解釈の特徴と並行しましたその前提となる理解を示している。石原にとって神秘主義は積極的宗教としてのキリスト教と本来相容れないものであるにもかかわらず、それはキリスト教信仰にとって無視し得ない重要な深みを与えるものであった。このことに「宗教論」第一版の特別の意義を認めていたといえるであろう。もっとも、石原の神秘主義概念はかなり流動的であり、これを最も広い意味で内的経験一般と理解する時には、それは彼のキリスト教信仰の概念と重なり合う部分も出てくるように思われる。いずれにしても、ここにキリスト教に関係する出来事を教義学的に裁断してしまうのではなく、歴史家の目で見えて評価していこうとする石原の態度を見ることができるよう思う。

この石原の解釈は、彼の利用した諸文献の理解とどのように関連するのか、あるいはこの解釈そのものの妥当性等は残る課題であるが、これらについては他日を期したい。

## 注

(石原の文章を引用するに当たっては、旧字体は適宜新字体に改めた。)

- 1) 石原謙訳「シュライエルマッヘル宗教論」 内田老鶴圃 大正3年、以後「訳著」と略記。
- 2) 「宗教論」の全訳は現在までに五種類ある。石原訳以外のものとして、河面仙四郎訳「宗教に就て」春秋社、1929年；豊川昇訳「宗教論」創元社、1948年；仁戸田六三郎訳「宗教論」コギト社、1948年；佐野勝也・石井次郎訳「宗教論」岩波文庫、1949年。河面、豊川、佐野・石井訳は石原と同じく「宗教論」第一版より訳出、仁戸田訳も底本の明示はないが原則として第一版より訳出されている。
- 3) 佐藤敏夫「日本におけるシュライエルマッハー研究」『日本の神学』第3号、1964年、79—80ページ、及び Takamori ,A., Schleiermacher-Literatur in Japan

besonders in theologischer Sicht. Ein bibliographischer Forschungsbericht, Kwansai Gakuin University Annual Studies, vol. XXV, Nishinomiya 1976, S.1f 参照。1910年には既に高倉徳太郎が東京神学社の卒業論文として「シュライエルマッヘルの『宗教論』」を提出していたが、これは内容解説の域を超えないという。

- 4) 「石原謙著作集」岩波書店, 第一巻, 1978年, 511ページ, 「キリスト教の源流」岩波書店, 1972年の「序—ある老学究の回顧と反省—」7—9ページ参照。
- 5) 「学究生活五十年」『石原謙著作集』第11巻, 1979年, 21ページ。
- 6) その後1923年にはスウェーデン語訳, 1944年にはフランス語訳, 1947年にイタリア語訳が出ている。Tice, T. N., Schleiermacher Bibliography. With Brief Introductions, Annotations, and Index, Princeton Theological Seminary, Princeton 1966, p.14 参照。
- 7) 石原謙訳著, V—VIページ。
- 8) Über die Religion. Reden an die Gebildeten unter ihren Verächtern. In ihrer ursprünglichen Gestalt neu hrsg. von Rudolf Otto, Göttingen 1899, 3. Aufl. 1913, 6. Aufl. 1967. 石原は第三版を使用, 本論では第六版のページ数に従う。Über die Religion. Kritische Ausgabe. Mit Zugrundelegung des Textes der ersten Auflage, hrsg. von G. Ch. Bernhard Pünjer, Braunschweig 1879. Über die Religion. in: Schleiermachers Werke, in vier Bänden, 4. Band hrsg. von Otto Braun, Leipzig 1911.
- 9) 訳著, 38—64ページ参照。
- 10) 同上, 39, 53ページ。
- 11) 同上, 64ページ。
- 12) Aus Schleiermachers Leben, hrsg. von Ludwig Jonas u. Wilhelm Dilthey, 3. Band, Berlin 1861, S. 275 ff. Dilthey, W., Leben Schleiermachers, hrsg. von Martin Redeker, Berlin 1970, erster Halbband S.456 ff.
- 13) 訳著, 64ページ。
- 14) 上掲。
- 15) Über die Religion, hrsg. von G. C. B. Pünjer. S.IV 参照。
- 16) Rothert は Otto の態度を引き継いで「宗教論」第一版を再刊することを自明の事とみなしているが, 現在ではこれは必ずしもそうとは言いきれない。E. Hirschによれば「宗教論」が成熟した形で現われたのは第二版であった。Über die Religion. Reden an die Gebildeten unter ihren Verächtern, hrsg. von Hans-Joachim Rothert, Hamburg 1958, s. XIII; Hirsch, E., Geschichte der neuern evangelischen Theologie im Zusammenhang mit den allgemeinen Bewegungen des europäischen Denkens, 4.Bd. Gütersloh 1952, S.559 ff. 参照。
- 17) Birkner, H.-J., Schleiermacher-Interpretation heute, in: Der evangelische

- Erzieher, 28 Jg., 1976, S. 324f. 参照。
- 18) Über die Religion, hrsg. von R. Otto, S. 14f., 211ff., 233. 参照。
- 19) 訳著, 40ページ。
- 20) 同上, 41ページ。
- 21) 同上, 54ページ参照。
- 22) 同上, 42—43ページ参照。
- 23) Über die Religion, 1799 S. 50 (原著のページ数)
- 24) 訳著, 48—51ページ。
- 25) 同上, 49—50ページ参照。
- 26) 同上, 41, 51ページ。
- 27) 同上, 412—414, 418ページ。この無限性という言葉は Unendlichkeit ではなく Unermeßlichkeit に対応する言葉であるように思われる。Otto, R., a. a. O. S. 82 (Anm.) 参照。
- 28) Brunner, E., Die Mystik und das Wort. Der Gegensatz zwischen moderner Religionsauffassung und christlichem Glauben dargestellt an der Theologie Schleiermachers, Tübingen 1924, S. 10.
- 29) Rothert, H.-J.(hrsg.), a. a. O. S. VII
- 30) Otto, R. (hrsg.), a. a. O. S. 211ff. 後に West-östliche Mystik, Gotha 1926, 2.Aufl. 1929, S. 324ff. Engl. transl. by B. L. Bracey and R. C. Payne, Mysticism East and West, New York 1957, p.233ff. において神秘主義的と目される「宗教論」における二つの契機をあげて、これらは厳密な意味では神秘主義ではないとする。Redeker, M., Friedrich Schleiermacher, Berlin 1968, S.60ff. 参照。
- 31) 石原謙「宗教哲学」岩波書店、大正5年、以下特に第一編第一章八節「神秘思想」116—137ページ、第二章三節の八「基督教的の神秘」206—214ページ参照。ここでは大正六年の第四版を使用するが、本文の変化は「文字の誤謬」「字句の訂正」に限られている。「序」6ページ参照。
- 32) 同上, 117ページ参照。
- 33) 同上, 125—133ページ参照。
- 34) 訳著, 51ページ。
- 35) 同上, 58—59ページ参照。
- 36) 「宗教哲学」131ページ。
- 37) 同上, 214ページ。
- 38) 同上, 119—123, 133—134, 151, 209ページ参照。
- 39) 同上, 213ページ。
- 40) 同上, 211ページ, なお「M. Luther と神秘主義」『石原謙著作集』第6巻, 27—68ページ参照。